

# 魅力ある学校生活の創造を目標とした教育実践

—— 小規模高校における学校行事の

指導を中心として ——

勝 山 一 義

## はじめに

高等学校生徒の多様化に対応する新しい指導のあり方が求められて既に相当の年月を経た。しかも、ここ数年間にも高校生には新たな風潮が入り込み、高校教育の改善は大きな課題となっている。(1)

高校生の多様化は、一校における多様化もさることながら、学校間の較差としてあらわれることも事実である。そこで学校間較差の解消のための施策が講じられることとなるのであるが、その完全実施が現実には困難であることを思うとき、各学校において、その学校の実情に即した教育が探求され、実践されなければならない。(2)

学習指導要領に関わりながら、さまざまな教育の理論が展開されるが、それを実践に移すのは各学校においてであり、咀嚼された理論は、その学校の現状分析に立った全体的見通しと、具体的教育場面に即応して生きた姿となる。

高校生の多様化の問題は、いわゆる底辺校に集約されてあらわれる。底辺校の教師はそれだけにその学校の教育のあり方を求めて、苦悩しつつ教育実践をすることになる。本校もそのような底辺校の一つとして、生徒のもつ諸問題を解決するために、目標を設定し、その達成を目指す教育活動を昭和50年度を第一年次として展開してきた。

目標の中心に「魅力ある学校生活の創造」をおき、その核に「学校行事」を据えたが、3年間でほぼ所期の目的を達成し、次の段階への転期を迎えている。ここでは特に学校行事に視点をあててこれまでの実践の経過を報告し、次の展開に向けての足がかりとしたい。

### 1. 本校のおかれた状況と重点目標の設定

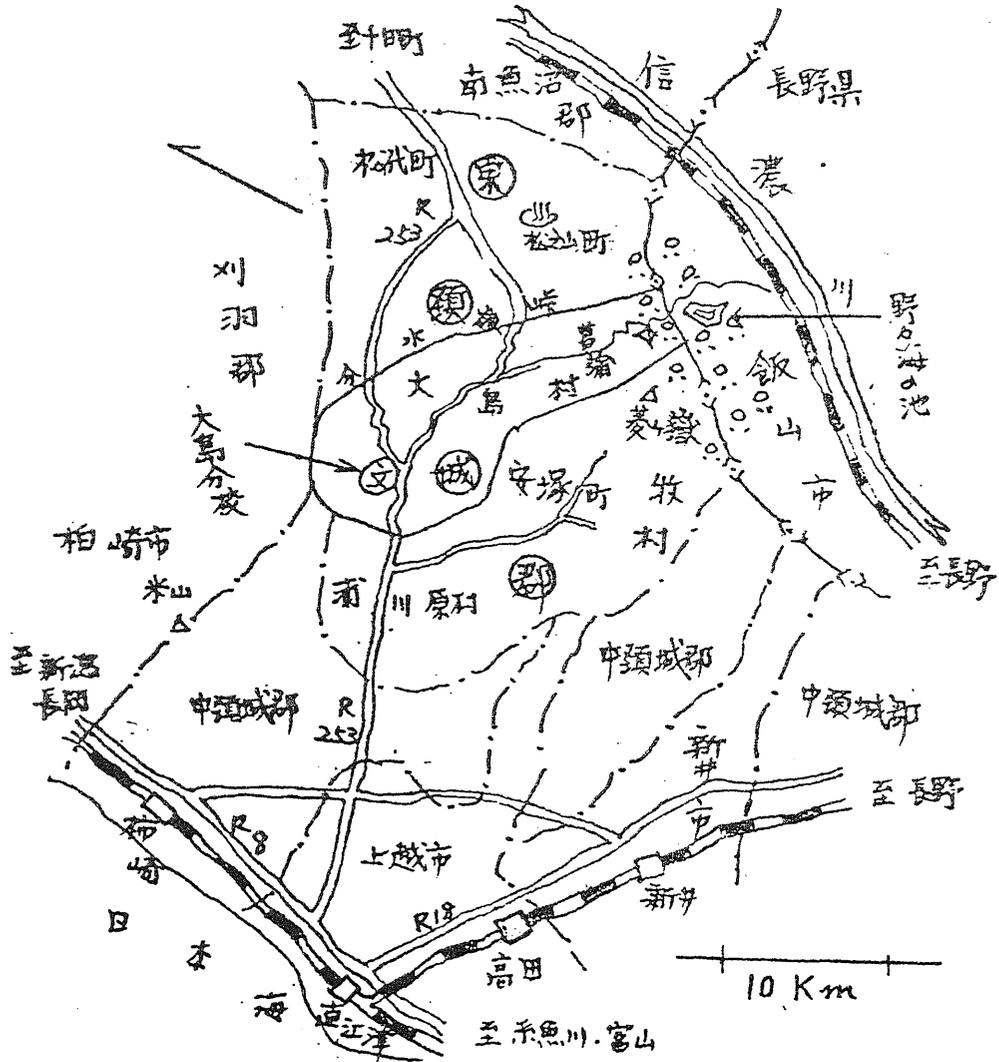
#### (1) 本校の概況

本校は新潟県東頸城郡大島村に位置する分校である。東頸城郡は新潟県の南部上越地方の、頸城平野と信濃川にはさまれた丘陵地帯であり、大島村は、そのほぼ中央に盆地状をなして、長野県境に接している。冬の豪雪と地すべりという厳しい自然環境の中で出稼ぎの村としても有名であり、夏は殆ど山の頂上付近まで水田の階段耕作をする。住民の勤勉に支えられた四季の美しい村である。

学校は昭和23年に、新潟県立安塚高校保倉分校定時制農業科として設置されたが、生徒数の

減少から、昭和48年に全日制普通科（1学級募集）となり大島分校と改称した（現在の3年生は全日制第3回生である）。全校生徒数105名、職員は教諭7名、実習助手・事務主事・用務員各1名で合計10名の小規模校である。

（図1） 本校の位置



(2) 本校生徒のもつ特徴と問題点

本校生徒も現代高校生が持つ一般的問題(青年期の問題、個人主義的・退屈的傾向)をもっているが、本校に近い分校、冬期間を除いて上越市内の高校に通学可能な地域にある分校として次のような問題をもっている。

ア. 学習面 入学学力検査の平均得点は各科目とも県平均より約10点下まわり、知能検査の結果も表1のように偏差値50以下の生徒が大勢を占める。学習意欲が低く、授業中も時に倦怠の様子がみられる。

イ. 生活面 ○個人的にも学校に対しても劣等感を持ち、特に男子は感情の抑制ができず、学校不信感や反抗的態度となってあらわれる。

○個の未確立と小規模校が重なって周囲の雰囲気と同調しないではいられず、低い方向に行動を共にする。

○学校生活の関心は上級生の下級生への威圧に向けられ、陰での圧迫が受けつがれる。

○校外生活の関心はバイク、友人宅へのもぐり込み、流行に敏感な服装に向けられる。

○1・2年生は上級生の威圧の前でじっと耐えつつ悪い面を学び、3年になるとこれまでの反動として勝手気儘に振舞う。

ウ. 昭和49年度の問題 定時制最終学年が3年生(4年生は職場実習)となった昭和49年度は、この学年が全日制に移行できなかったことに対する不満(3)が重なって問題が顕著にあらわれ、学校内には荒んだ雰囲気が広がった。

(表1) 本校生徒の知能偏差値

課 程		定 時 制		全 日 制		
入 学 年		46	47	48	49	50
卒 業 年		50	51	51	52	53
生 徒 数		20	27	37	45	48
知能検査名称		教 研 式	田中A B	田中A B	教 研 式	教 研 式
受 検 者 数		18	26	37	45	48
偏 差 値 分 布	60以上	0	1	0	0	0
	59～50	1	7	11	27	12
	49～40	7	7	19	11	22
	39～30	8	9	7	7	13
	29以下	2	2	0	0	1

### (3) 重点目標と指導の方策の設定

昭和49年度の苦悩の中で、教師は目標を設定して、昭和50年度を第一年次とする校風刷新のための実践をすることを決定した。

#### ア．生徒に期待できるものは何か

問題点を見つけて責めてだけいても健全な方向への変化は期待できない。生徒の良さを計画化された教育活動に発現していく過程で問題点を除去していかなければならないという考えに立って、解決の手がかりとして生徒に期待できるものを発見するところから、教師の作業が開始された。その結果は次の三点にまとめられた。

- 個人的には皆良さをもっている（善良・素直・いいものは受けとめる）
- 非常に粗野で逆方向に発揮されているがエネルギーはある。
- 弊囲気があれば同調する。

良き弊囲気をつくり、そこに生徒のエネルギーを集中させることが、先ず行なわれなければならないであろう。

#### イ．重点目標の設定

こうして設定された重点目標は次の三つである。

- i) 魅力ある学校生活を創造する
- ii) 基礎学力を身につける
- iii) 上級生の威圧的行動をなくする

#### ウ．指導の方策の設定

重点目標達成のための教師からの努力目標が「指導の方策」である。(4) 49年度末に先ず昭和50年度の指導の方策がつくられ、以後毎年度末にその年度の評価に立って、次年度の方策を立てて実践して来た。定着状況により、指導の内容と角度が変化してきたことは表2の通りである。2年間の実践の結果追試による個別指導が定着し、週番活動による自主規制も軌道に乗った。第3年次としての昭和52年度には、学期毎の学年別指導目標が共通理解され、各教師の教育場面で生活指導が行なわれるようになった。しかし、ここでは特に学校行事に視点をあてて実践の過程を見ていくことにする。

(表2) 目標達成のための指導の方策

重点目標		基礎学力を身につける。	自主性の涵養により魅力ある学校生活を創造する。	上級生の威圧的行動をなくする。
指導の方策	50年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 基礎テスト(年8回)</li> <li>○ 実力テスト(年3回)</li> <li>○ 追試による個別指導</li> <li>○ 表彰(科目別、総合とも10%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校行事を月に一回は入れる。</li> <li>○ 生徒会の日(毎水曜7限)を設ける。</li> <li>○ ホームルームで民主的活動力を養う(1、2年)</li> <li>○ ホームルームで進路指導を重視する(3年)</li> <li>○ リーダーを養成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 早期発見によりイニシアチブを取って調査活動をする。</li> <li>○ 無断欠席は電話連絡する。</li> </ul>
	51年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 基礎テスト・実力テストに個人カードを採用</li> <li>○ 評価の二段方式</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校行事を成功させる(全教師の協力体制をつくる)</li> <li>○ 全ての生徒が情熱の対象をもてるようにする。(学校生活の中で)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 週番活動を定着させる。</li> <li>○ 生徒との会話をもつ。</li> </ul>
	52年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 図書館活動の活発化</li> <li>○ 基本的事項をおさえた指導をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 月曜朝会を設けて生徒会に運営させる。</li> <li>○ 「明るく楽しい学校」を生徒会の目標とする。</li> <li>○ 生徒会の委員会ごとに目標をたてさせる。</li> <li>○ 校内放送を定着させる。</li> <li>○ 部活動を活発にする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学年別、学期別「指導目標」をつくる。</li> </ul>

## 2. 学校行事の本校教育活動への教育的効果

### (1) 本校における学校行事の意義

表2で明らかなように「魅力ある学校生活の創造」の核に学校行事を据え、それをとりまくものとして、その他の各教科外教育活動を配置した。学校行事は学校におけるすべての教育活動の総合の場である(5)という考えからである。特に本校においては、次の諸点から学校行事の意義が発揮されるであろう。

ア. 全校生徒の関心を学校生活に向けることができる。

イ. 学級の同質集団としての馴れ合い傾向に対して、学校行事では学年による縦の関係が生まれ、建前が前面に出される。

ウ．全教師の指導により成功に導きやすい。

エ．学校行事の成功により次のことが期待できる。

- ① 自主性を養い、指導性・協力を育て、集団活動の楽しさを体得させる。
- ② よき体験による喜び、成就感による自信を与え、真の楽しさが学校生活の中にあることを知らせる。
- ③ 生徒との接触の機会が得られ、信頼の関係が生まれる。
- ④ ホームルーム・生徒会活動・クラブ活動その他の教育活動全体に大きな影響を与える。
- ⑤ 生徒も教師も志気の向上がなされる。

それまでの本校の学校行事の問題点は次の２点にまとめられる。

ア．年間計画にあるから実施する。それは教師の計画であり、生徒の実行委員会はつくられるが生徒会組織とは無関係で、教師の手伝いをする程度。教師も担当者以外は与えられた役割を果たして手伝うという意識しかなかった。

イ．男子生徒の非協力性。素直に行動する女子生徒が中心的活動をするため、男子の無言の抵抗が非協力となってあらわれ、小規模校特有の男子の一蓮托生の傾向が拍車をかけて行事は味気ないものになっていた。

(2) 学校行事に生徒を主体的に参加させるために何をしたか。

上記の問題点を解決し、学校行事に生徒を主体的に参加させ、学校行事のもつ意義を実現させるためには、単に行事の際だけではなく日常の教育活動に於ても意識的な取り組みがなされなければならない。表 2 にも一部を示したが、次に上げる実践が総合されて学校行事に対する生徒の積極的取り組みが実現したと考えられる。

ア．学校行事をはじめとする集団活動の中核部分に男子を入れ、女子はアシスタント的役割につける。

イ．ホームルームの人間関係を民主的なものとして活動の習慣をつける。特に 50 年度の 1 年生からホームルーム活動を強力に指導する。

ウ．生徒会行事にリクレーションを多く取り入れ、集団活動の楽しさを体験させる。

エ．リーダー養成をする。(よき雰囲気を経験させるために、県青少年研修センターのリーダー講習会に生徒会代表数名を参加させる)

オ．学校行事と生徒会行事の関連をはかることにより学校行事を生徒会の主要な活動の場とする。

(6)

カ．教師の協力体制の確立。実行委員会の各係の顧問団に全教師をつけ、係の計画・活動を指導し、職員会議で青写真を出し合って検討し、共通理解を深める。

キ．集団思考の方法を取り入れる。生徒の計画段階や職員会議の場で集団思考がなされるようにする。(7)

ク．評価の重視 生徒自身による評価、教師から生徒への評価、教師のための評価を行事の度毎に、そして一定期間をまとめて行なう。(8)

このような教育活動の集約の場として個々の学校行事が展開され、一つの行事が学校を新たな歩みに向けて出発させる契機となる。いくつかの行事が果たした役割を検討してみよう。

昭和50年度夏季キャンプには、受身ながら行事の楽しさを感じさせ、51年度に入って、文化祭で、自主的な話し合いとそこから生れる協力の喜び、仲間による新しいダンス指導の素晴らしさを体験させることができた。このあたりから生徒の行事に対する取り組みに主体性がみられるようになり、日常の学校生活にも活気がみられるようになった。ところがスキー大会で欠席が多く、彼らが素晴らしい感動を味わえなかった体験が、逆説的效果を生み、そのような心理から予備会に対する真剣な取り組みがなされ、2年生にとっては昭和52年度に向けて大きな自信を持つ結果となった。卒業式は、卒業生の果たした功績をたたえつつ、在校生のなすべきことを自覚させる場となった。(9)

### (3) 昭和52年度への展望

#### ア．二年間の変化

この二年間にも生徒の基本的傾向に変化はなく、因習は断ち切れずに下級生に伝えられるので、表面的には問題に対処することの明け暮れであった。そのような中で評価、目標の確かめ、指導の方策の検討をくり返し、全体の流れを見失なわないように努めた。

二年間で、新しい芽は確実に育ってきた。行事を計画し、参加することの楽しさを知り、生徒会活動が活発化し、部活動・クラブ活動への積極的参加がみられるようになり、授業中の態度に落ちつきが生まれ、追試や、週番活動による自主規制が定着した。

#### イ．2年生の状況

52年度の学校の姿は3年生のあり方によって決まる。1月に入るとすべての教師の思考は、52年度のあり方に向けられ、2年生を中心とする在校生の分析にもとづいて、本年度の評価の上に立った指導の方策が検討される。今回の2年生は、学級の中にまだ易きに流れる傾向が相当強くあり、2年間上級生の威圧の前に痛めつけられているので、3年になったとたんに、抑えていたものを爆発させる可能性がある。一方この学年は、新しい動きも多く学んでいるし、個性に富んだリーダーも数人いる。自分達の手で因習を断ち切ろうとする考えもでてきている。

#### ウ．52年度に向けての教師の指導

2月から52年度に向けての指導が開始された。1月末には次の4点が確認され、強力に指導が行なわれた。

- ① 「明るく楽しい学校をつくろう」ということを生徒会の活動目標として植えつける。
- ② すべての生徒が新年度に向って、何れかの場で活動を開始するように、一人一人の生徒について点検し、指導する。
- ③ 春休みを新年度の諸活動の準備完了時期とする。

- ④ 新年度早々に予想される威圧行為は、直ちに強力な指導を加え、問題行動の芽をつみとる。  
(52年度の指導の方策は表2に上げてあるので、ここでは重複をさけることにする)  
新任を迎えての教師の体制作りとしては、4月入学式までに目標、指導の方策、当面の指導目標の共通理解を二日間かけて行なう。

52年度に入っても、早々に予想通り威圧行為がみられたが、それがおさえられた後、生徒は各分野に生き生きと活動を開始した。目標設定による教育活動が第三年次を迎えて学校に明るいムードがあふれてきたことは、生徒達の目にも明らかとなった。(10)

### 3. 旅行的行事としての<sup>しょうぶ</sup>菖蒲牧場キャンプについての考察

本校恒例の夏季全校キャンプを、昭和52年度には、村内の長野県境にある菖蒲牧場キャンプ場で実施した。学校教育の大きな流れの中で一つの行事がどのように位置づけられるか、その位置づけの根拠が、その行事運営の過程のいかなる指導場面の結果によるものかを、この行事の計画、準備、実際の中から見て行きたい。

#### (1) 計画と実際

##### ア. 計画の作成

#### ① キャンプ運営担当教師(3名、6月前定期例職員会議で選出)による準備活動

i) 目的地の決定一笹ヶ峯牧場と菖蒲牧場の二案を示し、生徒の意見を問うという形をとり、上記目的地を決定した。これによって生徒の気持をキャンプに向けることをねらったものである。

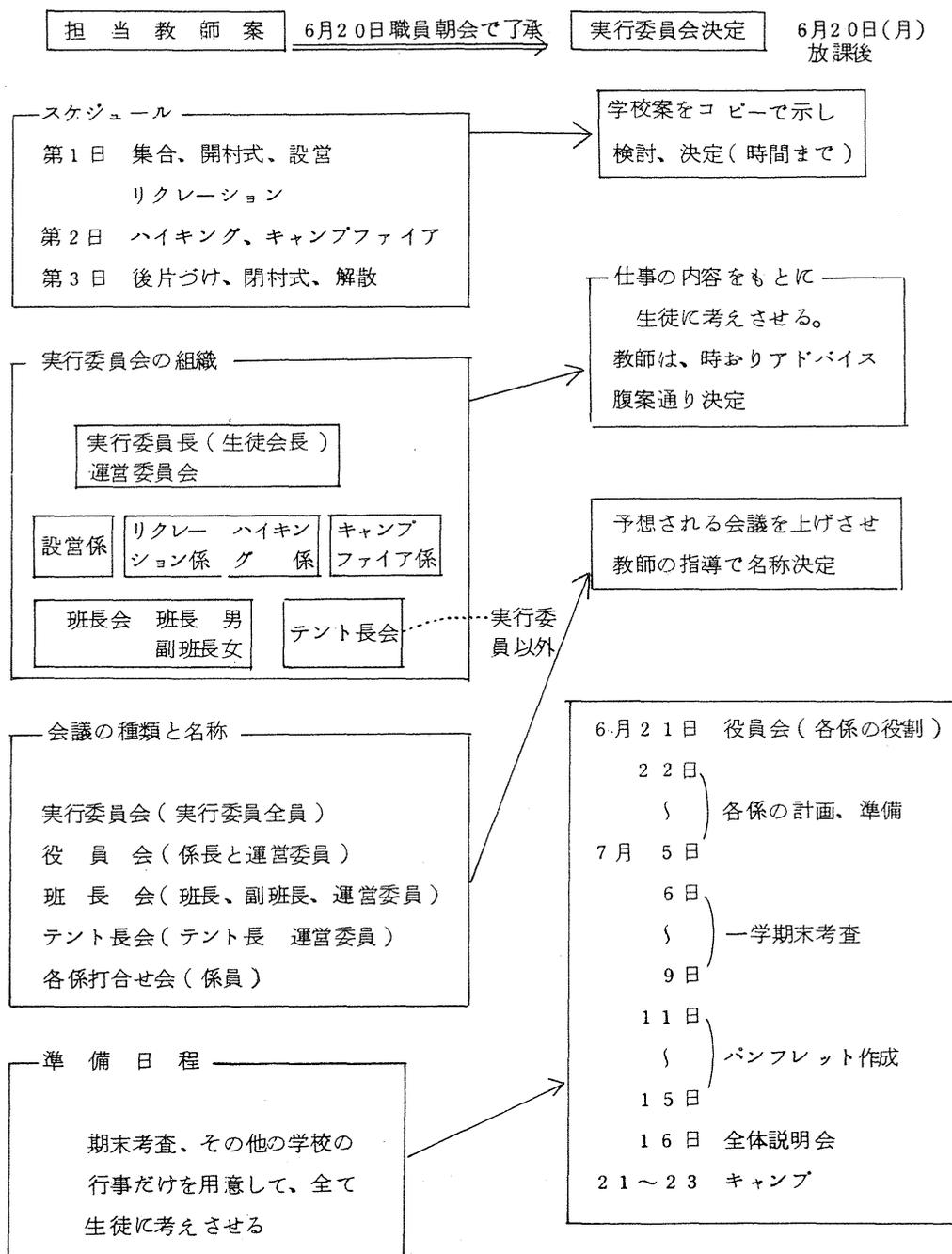
ii) 実行委員会の構成と第一回委員会の招集 運営担当教師の合議により生徒会役員・総務委員全員と各学年男女各1名をもって実行委員会を構成しようとする案を生徒会常任委員会に提出する(6月17日)。常任委員会では、キャンプ行事の仕事が多いことを理由に学年代表委員を男女各2名に修正して決定した。生徒会のキャンプ成功への期待を示すものである。こうして全生徒の3分の1に近い30名余で第一回実行委員会が召集された(6月20日)。

#### ② 第一回実行委員会の仕事 キャンプ日程・実行委員会の組織・準備日程

担当教師は、第一回実行委員会で行なう仕事について検討し、職員朝会で了承を得た上で実行委員会を召集した。教師案はキャンプ日程以外は、生徒に考えさせたが、表3のように殆ど教師案の通り計画された。

#### ③ 職員係顧問決定(6月21日職朝)

(表3) 第1回実行委員会の仕事



イ．各系の任務と準備状況

6月22日（水）から7月5日（火）までの2週間は各系の計画と準備の期間である。前半の1週間は各系の計画に、後半の1週間は計画の再検討と具体的準備にあてられた。各係では毎日あれこれと相談し、書物でしらべ、他の機関に質問し、現地調査をした。ハイキング係などは役員会の結果、問題点を指摘され、計画を最初から立て直した。

顧問教師も係の打合せには必ず出席し、必要を見極めながら指導を行ない、教師間の打合せも2回もって細部に亘る検討をして、共通理解をはかった。

一学期末考査は、学期末行事としての校内球技大会（生徒会）、屋外清掃、学級PTAなどが実施されたが、その間に生徒達はパンフレット作成、全体説明会などを、行ってキャンプの準備を完了した。

ウ．キャンプの実際と問題点

梅雨明けの21日から予定通りキャンプが実施された。表4の日程表の通りである。全日程を次第に盛り上げながら終了した。疲れの出た最終日の片づけに協力が見られ麓の部落での解散は名残りおしげなさわやかなものとなった。

（表4） キャンプの日程

第1日（21日 木）	第2日（22日 金）	第3日（23日 土）
A.M 9:20 菖蒲部落集合	A.M 6:30 ラジオ体操	A.M 6:30 ラジオ体操
11:30 キャンプ場着	9:00	9:30
P.M 1:00 開村式	） ハイキング	） 後片づけ
2:30	P.M 4:00	10:50
） リクレーション	7:30	） 清掃
3:30 昼の部	） キャンプファイア	11:00 閉村式
7:00	9:00	P.M 1:30 菖蒲部落にて解散
） リクレーション	10:00 就 寝	
9:00 夜の部		
10:00 就 寝		

しかし、このキャンプにも問題がなかったわけではない。むしろ初期にはキャンプの成功が危まれるほどの問題があったのである。問題は主として3年男子に見られた。キャンプの楽しさを解放された自由（集団生活に従わないエゴによる身勝手な行動）に求めようとする雰囲気がある。具体的には流行の服装、全体行動での傍観者の態度、他校生徒の呼びよせなどである。

昭和52年度に入って学校には健全な動きが相当明瞭にあらわれていたが、旅行的行事のよ

うに学校を離れる場では、平素かくされていた問題傾向が表面にでてくる。そして多くの生徒は、悪いと知りながらも、このような雰囲気と同調しないではいられないのである。

今回のキャンプの場合、第一日から、係生徒・職員の真剣な取り組みによって問題を解決してきた過程があったのであり、この軌道修正によりキャンプ行事の意義が大きく発揮されることになったと考える。

#### エ、軌道修正の過程

軌道修正はいつの場合でも出来事を契機として行なわれると考える。今回のキャンプでは、図2のように、三つの出来事が大きな意味をもったと思う。一つずつ見て行きたい。

##### 出来事A リクリレーション係長の怒り

リクリレーションは1日目ということもあって3年男子の非協力が目立った。夜の部のフォーダンスの時に、ついに係長の怒りが爆発して大声で一言怒鳴った。

「おい！踊りたくねえもんは帰ってくんねえか！」

そしてリクリレーションの閉会式の際に言った。

「さっきはついカーッとになって大きい声を出してかんべんしてくんない。おれ達係もふざけているんならいいよ。だけど、おれ達係が一生懸命やっているのにふざけられると、ついカーッととして……。かんべんしてくんない。」

いつもは行動を共にしている仲間の口からこのような正当論を聞いたことは、3年男子にとっては驚きの体験だったであろう。

##### 出来事B 夜中の侵入者を指導

全員寝静った第一夜午前2時、3年男子との約束でバイクでやって来た他校生徒3名が、教師につかまり、明け方まで調査指導されて帰ったという事件である。このことは3年男子は全く知らなかったが、2年男子や3年女子は本部の近くに寝ていて知っていたので、翌日の朝食準備中には、3年全体に知れ亘ったと思われる。そして彼等に対しては、自分達のところへ何等かの影響が来るのではないかという心理的圧迫となったと考えられよう。

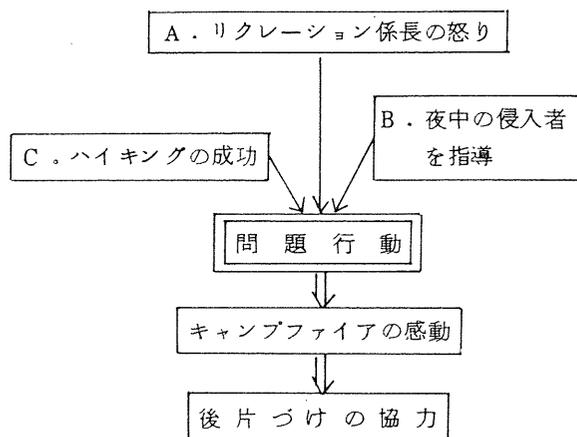
##### 出来事C ハイキングの成功

このような状況から、ハイキングの成功が危まれた。班別ハイキングでは、全体的統制がゆるめられて、勝手な行動になってしまうのではないかと心配されたのである。朝食準備中に運営委員は対策を協議し、班長会議を召集して責任の自覚を促した。ハイキング係も、自分達の企画したことがぶちこわしにならないようにと、終始毅然とした態度で指導に当たった。こうしてハイキングは計画通りに進行し、目的地の湖水のほとりのぶな林に囲まれた草原で、青空の下、全校生徒の手つなぎ鬼が、若者らしい健康な美しさを描き出したのである。

これらの出来事が問題行動に作用してキャンプファイアの感動に向けて軌道修正できたのだと考えるのである。

これら、キャンプ生活を送る中での変化は、生徒にも敏感に感じられていたのであり、夏休

( 図 2 ) 軌道修正の過程



み後に書かせた感想文にも  
このことがあらわれている。

○実行委員が毎日毎日遅く  
まで残って計画を立てた  
甲斐があり、キャンプフ  
ァイアの時の皆の顔は実  
に生き生きとしていて、  
一人一人の顔をじっと見  
つめていると何だかほほ  
を伝わっていく熱いもの  
を感じ、決して今日の今  
の時間を忘れないように  
と心に誓ったのです。

( 3 女 )

○キャンプ生活の最大のうれしさは、生徒めいめいのやさしさや協力が実に積極的に出ているということです。はじめは不真面目に参加していた人達が、いつの間にか中心者にひかれ、一人一人が協力して楽しく盛り上げ、最後は皆一心同体となっている。何と暖かい人達ばかりなんだろう。( 3 女 )

#### オ. 軌道修正の考察

出来事をして軌道修正の契機たらしめたものは、何といっても、計画・準備の過程で醸成された成功への意志があげられるであろう。その上にキャンプ独特の目的としての、規律の生活・協力の楽しさ・大自然の浄化作用があったのである。又、それぞれの出来事を適確にとらえて、適正な対応を行なう教師の指導がそこにあったことは当然である。

キャンプ行事には、普通に言われるキャンプの目的がある。しかし、団体キャンプの目的においては、それらが、日常生活には見られない高次の美に結集されなければならない。それは、さまざまな障害を乗り越えてこれまで知らなかった世界を体験することに見られるのであるが、その場合、一時はマイナスに行動した生徒も、乗り越えの過程で内面の変化を通過するのであって、共同の美の世界の創造には、参加者全員の何らかの飛躍が伴っていると考えられる。

#### (3) 昭和52年度キャンプの位置づけ

2 学期に入って次のような新しい傾向が見られるようになった。これまでは問題傾向に同調しながら自分達の企画の成功の条件をつくり出していたリーダーに、自信に裏づけられた行動が見られるようになり、生徒全体も落ちついた協力的態度を示し、授業中にも真剣に学習する様子があらわれてきた。

教師は2 学期に入って、今回のキャンプを評価して、「残存する問題傾向と、次第に育って来

た健全な明るさとの均衡状態の中で今回のキャンプを行ったが、キャンプの成功は健全な明るさが伸び広がっていく契機となった」と位置づけたのであるが、2学期を終ろうとしている今、その評価が正しかったと考えている。

#### 4. 本校における今後の教育課題

学校行事を核とする魅力ある学校づくりの実践について3年間の経過をまとめたが、学校行事は学校生活の中で「節」(11)の役割を果たしたと思われる。節という意味は単に学校生活に変化とuringおいを与えるだけでなく、それを通して、学校全体も個々の生徒も一段と発展し、成長していく飛躍台になるということである。学校生活を送る中で生ずる問題性は、個別行事の目的を達成するための集団活動の中で解決課題として現前するのであり、それを乗り越えることが集団の質の向上と個人の成長に作用して、学校行事を学校教育の動的展開の節たらしめるのだと考えるのである。

学習意欲に乏しかった本校生徒が、学校行事を契機として、落ちつきある態度、自覚した行動・授業中の学習に対する真剣な姿勢を示すようになったが、このような日常生活が再び行事の質の向上に作用するであろうと思われる。こうして、日常の教育活動と学校行事は関連の関係を取りながら、学校教育が展開されるのである。

生徒の関心を学校生活に向けることを第一のねらいとした本校における学校行事の指導は、3年間でほぼ目標を達成したと考えられる。しかし、学校行事の実施に際しては、これからも生徒のもつ原初的問題傾向と対決していかなければならないであろう。問題傾向の日常生活での存在の場はホームルームであるが、そこで示す生徒の行動が本当に高められていくには、単にロングホーム等のホームルームの活動だけでなく、学校で最も長い時間を過ごす授業に負うところが大きいからである。ようやくあらわれて来た学習時の真剣な目ざしをしっかりととらえ、教科学習への取り組みの習慣をつけるためには、教師の学習指導に関する研究が望まれる。教科学習の中で知識を求めて考え、相互に高め合う集団をつくること、ホームルームをよくし、学校行事の質を高めていくことになるであろう。

また学校行事については、単に生徒の関心を学校生活に向けることを目的とする段階は終わったと思われる。これからは、教師が運営する行事、生徒が主体的に活動する行事、そして生徒会行事を時間的に適正な配置をすることと、個々の行事の目的を明確にすることの作業がなされなければならないであろう。

学校教育においては、学校のおかれた現実と将来の見通しを共通理解し、精選された行事計画を持ち、日常の教育活動に基礎を置きつつ、個々の行事を遂行する過程で、個々の生徒の成長と学校全体の発展が期されなければならないからである。

## おわりに

これを記している今、学校では、53年度、54年度の学校の姿が職員室の話題にのぼっている。これまでの実践の結果を正当に評価し在校生の分析を行い、新しい重点目標を設定することが、冬休みを終った時点での教師の課題である。

この3年間に転出された教師は5名に達した。第1年次の教師は52年度には3名しか残っていない。しかし、目標は受けつがれて教育効果として実現された。今後も職員の移動が多いと思われるが、この問題を解決する方法は、目標を設定し、その達成のための指導の方策を共通理解することだと考える。

最後に転出された先生方、現在勤務中の先生方の本当に真剣な実践の結果がこの報告となったことを付記して稿をおわりたい。

### (注)

- (1) 暴走族や性非行の問題は、高校生の学校離れを象徴して、高校教育の各学校における抜本的改善の必要性を示している。
- (2) 吉本二郎「学校生活の再設計」 教育審議会の答申と学校経営  
学校経営研究第2巻 昭52.4
- (3) 表1のように、全日制移行を期待して応募したこの学年から生徒数が増加し、増加に対応して知能偏差値の分布も上っている。
- (4) 小規模校なので、努力目標と指導の方策とを兼ねて設定した。本来は年度の重点目標達成のための学校全体の目標を努力目標とし、それを更に分掌に具体化したものを指導の方策というべきである。
- (5)(6) 吉本二郎他編『講座 高校教科外教育活動』5「学校行事」明治図書 昭47
- (7) 吉本二郎氏が昭和34年に『現代学校経営論』（理想社）で主張し、最近では高野桂一氏が、学校経営現代化理論の核に据えている。生徒指導面の集団思考については吉本均氏の『集団思考の成立とは何か』（明治図書 昭47）を参考にした。
- (8) 梶田叡一『教育における評価の理論』p56 金子書房 昭50  
学校新聞「保倉学報」が評価活動として大きな役割を果たした。例えば、次のような見出しで行事を取り扱っている。  
No70（昭和51年12月20日）「やったぜ!!文化祭」  
No71（昭和52年 3月 4日）「みんなハッスル!スキー大会」  
No72（昭和52年 7月20日）「大育祭大成功!」
- (9) 儀式的行事には生徒会の直接の参加形態をとらないが卒業式には生徒会の代表が送辞・答辞を読むことによって、分校生として高校生活を送ることの意義を実感として認識する。
- (10) 保倉学報（昭和52年7月20日号）には「我校の新しい動き」として特集が組まれ次のよ

うな記事が載った。

「今年の生徒会行動は、とにかくめざましいの一言につきると思う。それは今までになかった新しいものや、今までのものに改良を加え、それを各行事、各委員会などで、つかっているからだ。（中略）生徒会主催のリクレーション大会など本当にすばらしかったし、体育大会も実行委員はじめ生徒全員の努力で、青空の下で最高であった。学校は、生徒の活動で明るく活発になっている（後略）」

- (1) 菊島正樹「生活にリズムとアクセントをもたらす学校教育」児童心理第29巻第2号  
昭和50年2月号